デュエルモンスターズ

Mr.ねこ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

▲夢の中に登場した謎の石像が、何やら望みを叶えてくれるらしい。ならばデュエルモンスターズの夢が見たいので、そのデュエルモンスターズに必要なカードを使えるようにして欲しいと望んだ。すると何故か気付けば五歳児になっていて、しかもＮＡＲＵＴＯの世界だった。▲いやいや、違うよ?!夢を見たかっただけだよ?!なのに何故転生?!しかも願ったのはデュエルモンスターズなのに、何故にＮＡＲＵＴＯ?!ちょっ……エェ～（？▽？；）

目次

石像さんって超怖いの巻 ―― 1
問題が山積みの巻 ―― 6
心の傷を持つ者達の巻 ―― 11
初めての召喚の巻 ―― 16
ナルトに続いて二人目の友達が出来ましたの巻 ―― 23
イタチの凶行の巻　上 ―― 28
イタチの凶行の巻　中 ―― 33
イタチの凶行の巻　下 ―― 38
サスケの闇落ちを防ごうの巻 ―― 43
三代目の堪忍袋が切れるの巻 ―― 48
デュエルモンスターズという力の説明の巻 ―― 53
説明会は終わったけど……の巻 ―― 58

石像さんって超怖いの巻

いつもと変わらぬ1日を終え、俺はこれまたいつもと変わらず普通に眠りについた。
そしていつもと同じように、明晰夢を見る。
とは言っても、夢の中で全てを自分のコントロール下に置こうとすると流石に脳が覚醒状態になって目が覚めるので、必要最低限にコントロールするだけで他には何もしない。
しかしながら、結構そこそこにコントロール出来るので、俺は夢を見るのが好きだったりする。
ともあれ、そうやって明晰夢を楽しもうと思っていた俺だったのだが、今日はいつもとは違う夢らしい事に気付き、呆然と白く広い空間にポツンと佇む石像を怪訝な表情で見つめる。
――この夢は何なのだろうか？
初めて見る夢に俺は少々の戸惑いを抱きつつ、少しの躊躇いを胸に石像に恐る恐る触れる。
するとその途端、石像から淡い光が発生。
それに驚いて大きく跳び退くと、目の前の石像に注視した。
しかし石像は光っただけで、大してそこから変化する事はない。
――変な夢だな。
初めて見る夢に少しのワクワク感があったのは石像に触れるまで……いや、石像に触れてから光始めたところまでだった。
今はただ光る石像を眺めているだけで、とてもつまらない。拍子抜けである。
しかしそう思ったのも束の間で、上半身が裸の男性を模した石像が震え始め、震える度に言葉を喋り始めた。
「お前の望みを言え。……どんな望みも叶えてやろう」
光る石像が震えながら言う言葉に、俺は咄嗟に身構えていたがニヤリと微笑み構えを解く。
変な夢だが、これはこれでまた面白い趣向だと思えたからの笑みである。

初めて見る夢であるが、もう既にパターンは想像出来た。
要は望みを言ってしまえば、その望みに関係する夢が見れるのだろうと判断出来る。
恐らく、深層心理の俺が俺自身へと望む夢を見せてくれるという事なのだろう。
――ならば何が良いだろうか？　どんな望みを言えば、自分の見たい夢を見せてくれるのだろうか？
顎に手を当てて少し思考の海に沈み、最適解を出そうと考える。
そして思い付いたのは、遊☆戯☆王の夢を見たいという答えだった。
子供の頃にデュエルモンスターズが流行って、それに漏れる事も無く俺もやっていたカードゲーム。
モンスターカードを出せば、機械がカードを読み取って３Ｄ映像でモンスターを再現し、トラップカードや魔法カードを駆使して対戦相手とあの手この手の戦術を楽しむ。
そんなデュエルモンスターズの夢を見れたならば、きっと楽しい夢のひとときとなるのは間違いないだろう。
そして何より、「トラップカード発動！」とか「魔法カード発動！」とか言いたいし、３Ｄ映像のモンスターを見たい。
そう一度でも思ったなら他には何も思い浮かばず、俺は石像に向かって満面の笑みで叫んでいた。

「デュエルモンスターズのカードを自由自在に駆使して闘いたい！」
俺が叫んで数秒後、光る石像はまるで俺の意図を反芻するかのように震えながら二度、三度と俺の望みを繰り返し、最後に「良かろう。お前の望みを叶えてしんぜよう」と呟く。
そして再び石像が震えながら、尚も言葉を紡ぐ。
「しかし、デュエルモンスターズのカードは新旧数多く存在し、全てのカードは余りに多過ぎる。そして、同一のカードでも内容が大きく変じている物が存在する事を認識した。
それ故、お前の望みを叶える為に規模を限定させて貰おう」

何やら含みのある言だが、言っている事は確かにその通りだ。
俺だってデュエルモンスターズのカードがどれだけの種類が存在するのか知らない程だし、効果も同一のカードであっても新旧で大きく異なる物も存在しているのを認知している。
そして、俺が知っているのは融合が活躍する学園編くらいまでなので、どのみち使えるカードの規模を限定されたとしても困りはしない。
と言うか、深層心理の俺が俺の知らない情報を知っている訳が無いので、その辻褄合わせに石像が話を合わせているのだろう。
そう判断した俺は、光る石像に頷く事で了承した旨を伝える。
すると石像は、「お前の望みを魂へと刻む。激痛を伴うが我慢せよ」と何やら聞き逃せない言葉を投げ掛けた。
しかしこれはあくまでも夢であり、現実のように恐怖する事はあっても痛みなどは感じる筈も無い。
故に俺は、余裕の笑みでもって再び頷く事で了承した旨を示した。
その直後、俺は動転直下の混乱へと陥る。
何故なら、夢なのに強烈な激痛が体を支配したからだ。
しかもその激痛は、少しずつ心臓へと集中し始め、そればかりか集中する事で痛みの度合いが増しているのか、気が狂いそうな痛烈な痛みへと変化。
呼吸する事すら忘れてしまう程の激痛に、俺は思わず痛みが何故夢の中で発生するのかという疑問すら考えられず、ただただ蹲り、ただただ必死に身を縮め、ただただ痛みが過ぎ去るのを歯を食いしばって耐えるだけだった。
そうして、頭の先から足の先までを冷や汗と脂汗でグッショリと濡らした俺は、漸く過ぎ去った激痛に安堵しつつ激しく酸素を求めて荒い呼吸を繰り返す。
――痛い！　夢なのに痛い！
明晰夢を見る俺でも初めての現象に、これは本当に夢なのかと疑問を抱かずにはいられなかった。
今まで一万回を越える夢を見てきたが、一度足りとて夢で痛みを感

じた事は無い。
故に俺が断言出来るのは、決して夢では痛みを感じないという事。
なのに、それなのに今俺は痛みを感じていた。
それもこれまでの人生で感じた事の無い激痛であり、気が狂うと思わせられた程の痛み。
――これは夢じゃない！　現実だ！
この夢が現実であると認識した瞬間、俺は未だに目前に佇んでいるであろう石像を思い出し、ブルリと体を震わせる。
勿論その震えの原因は、恐怖故の震えだ。
俺は真っ白い床へと向けていた顔を恐る恐る上げ、変わらず光っている石像へと視線を向ける。
すると石像が再び震えながら、俺へと言葉を投げ掛け始めた。
「我はお前の望みを叶え、お前は望む力を得た。これからお前が歩む人生では、その力がお前の進む道の補助をしてくれるだろう。
道は険しくお前の望む結果となるかはお前しだい。しかしながら、これから行く世界固有の力を得つつお前の魂へと刻んだ力を合わせれば、きっとお前の望む結果へと繋がる筈。
努々忘れるな。お前の力は絶対では無く、しかし望む結果へと繋がるかはお前しだいの努力だという事を」
俺へと壮絶な痛みを与えた石像を恐る恐る見つめていると、石像はそう告げてどんどん激しく輝き始める。
そして混乱する俺を置き去りに、光によって既に目を開けていられなくなった俺へと更なる言葉を投げ掛けてきた。
「世界を真に楽しめるかは、ただの人間であるお前では甚だ疑問だが……それもお前の努力しだいでは、きっと腹の底から笑える結果へと繋がるだろうと信じておる。
力の限り努力し、望む結果を手にして精一杯世界を楽しめ。そして再びこの場所へと辿り着いたならば、更なる世界へとお前を導こう。
暫しの別れだ。……行くが良い」
網膜を焼くような白い光によって瞼を閉じた俺に、謎の石像がそう呟くと俺の意識が暗転。

そして数瞬の後に意識が回復した俺が目にしたのは、まるで幼児のものへと変化した小さな手の平と、畳を踏み締めるこれまた小さな足へと変化した自分の体だった。

問題が山積みの巻

火遁の術、水遁の術、風遁の術、土遁の術、雷遁の術という五つの属性の術を始めとして他にも陽遁の術や陰遁の術などという扱うのが困難な術、更には血継限界と呼ばれる固有の遺伝子を持つ者にしか扱えない特殊な術も存在する『ＮＡＲＵＴＯ』というタイトルの漫画世界。

下忍、中忍、特別上忍、上忍、暗部等々の区分された役割により忍者として活動する者達が、日夜凌ぎを削る血生臭い『ＮＡＲＵＴＯ』というタイトルの漫画世界。

……そんな世界に、俺という魂が五歳児の体を新たに得て降り立った事を、この体が五歳の現在まで生活していた記憶を思い出す事で認識せざるを得なかった。

衝撃、動転、混乱、そんな言葉では決して表現出来やしない心の極致へと追い込まれた俺は、一周回って冷静な程に無表情で事実を噛み締める。

そして謎の石像から魂へと刻まれた力が、魂に刻まれた由縁のせいなのか、はたまたそれ以外の理由によってなのかは不明だが、確かに不思議な力を自分が持っているのだと認識出来た。

そう、自身が置かれた状況や自身の力については冷静に認識出来たのだ。

だが、一体全体どうして俺がこんな状況に立たされなければならないのかという疑問は解消しておらず、そしてこの世界が『ＮＡＲＵＴＯの世界』であって、その主人公と同世代だという事実に文句を叫びたい。

「ふざけるな！」とか「明日の仕事はどうすんだよ！」とか「この世界の俺は、親に滅茶苦茶嫌われてるじゃん！」とか、様々な文句を内心で叫んだ後、力無く畳の上に腰を下ろした。

――これは夢なのだと思いたい……が、どう考えても現実だ。

石像に向かって内心で叫んだ後、俺は諦めたように悟り、事実を事実として受け入れた。

否、受け入れるしかなかった。
そして受け入れると同時に、この世界での俺は両親から死ぬ程に嫌われている事を思い出し、大きく溜め息を吐く。
どうやらナルトに九尾が封印された日に、俺の十三歳年上の兄が死んだらしく、当時零歳だった俺に対して「何故ムジロが死ぬんだ！忍びとして優秀なムジロを失うくらいなら、この生まれたばかりのゲンセイが死ねば良かったんだ！」と両親は叫び泣き、それ以来冷たく扱われているようだ。
とは言え、両親は両親でその時の発言を心底悔やんでいるらしく、ちゃんと愛情持って俺へと接するべきだと考えてもいるようなのだが、一旦口から出してしまった言葉のせいで、どうしても俺へと素直な感情で接する事が出来ず、今もって冷たく扱われているというのが現状。
「ハァァァ」と、それぞれは大きな溜め息を吐きつつも、俺はこの世界の両親の気持ちも少なからず理解出来るので、特に腹立たしくは思わなかった。
それと言うのも、やはり肉体は別としても精神は大人であるのが大きな要因だろう。
普通の子供ならどうして自分の親はこんなにも冷たいのだろうかと、そんな風に心底悩み苦悩するのだろうが、大人の精神を持ちながら大人になるまでの記憶を持っている俺からしたら今生の両親の気持ちが痛い程に理解出来るのだ。
本来は愛情を持って接したいが、悲しみによって混乱して思いもしない言葉を自身達の愛すべき赤子にぶつけ、そのせいで自分達を許せずどう自分達の子供に接して良いのか分からない両親。
今や五歳となった俺を両親としては抱きしめてやりたいが、しかし自分達の子供に暴言を吐いた自分達が決して許せない両親は、まるで俺という子供を慈しむ事をしない事こそが自分達の罰であるかのように日々を過ごしている。
謎の石像に向かって、もう一度叫びたくなった。
もうこの世界に降り立つのは決定事項で構わないが、こんな複雑な

家庭ではなく普通の家庭にして欲しかったと伝えたい。
或いは、両親が存在しない子供という立場でも構わないとさえ伝えたい。
生活するのに困るだろうが、孤児院とか存在するだろうし、何より肉体は五歳でも中身は成人なのだから別に独り暮らしであってもそれ程には苦労しないだろうと思えるので、やはりここは切実に謎の石像に伝えて現状とは違ったものにして欲しいと思わざるを得ない。
まだこの世界に降り立った事を認識してから十五分程しか経過してないが、既に何度目か分からない大きな溜め息を吐く。
そうやって愚痴とも悪態とも表現出来る事を内心でひたすら叫ぶと、事ここに至ってもう全てがどうしようも無い事であり、俺が受け入れなければならない事なのだと思い素直に心を開いた。
すると不思議なもので、この世界に来たのだからこれからの事に対して色々考えるべきだと思え、心に少しの余裕を持って思考の海に沈む。
――まず考えなければならないのは、幾度も訪れるであろう死の山を越える事。
そう、この世界では何度も避けられない死に直面する時が存在する。
ペインやら戦争やらという事柄の、避けられぬ闘いだ。
そこで生き抜く事を考えると、俺が謎の石像から貰った力だけでは厳しいだろう。
何故なら、石像が述べていたようにこの力には規模が限定されているからに他ならない。
一つ、デュエルモンスターズの力は俺の知っている物語の内容部分までに登場したカードしか使えず、また神のカードは存在する事は存在するが現状は何故か使用出来ないと感覚で分かっている事。
二つ、身体能力を上げる魔法カード等は自分だけにしか作用せず、他の人間どころかモンスターにさえ作用しないという事。
三つ、一日に何枚もカードを使用出来るが、使える同一カードは三枚までという事。

四つ、召喚出来るモンスターは、召喚したモンスターが死ぬか儀式召喚の生け贄にしない限りは、新たに召喚出来ないという事。……つまり、予め五体召喚していた場合、先程述べた二通り以外には新たに召喚出来ないのである。

等々と、他にも様々に制限があり、決して魂に刻まれた力が万能ではないのだというのが感覚で理解出来た。

はっきり言って、これは由々しき問題である。

化け物みたいに強い者達の集団に襲われたら、或いは雑魚集団でも尋常ではない数の忍者集団に襲われたら、デュエルモンスターズという一見すると強力な力を有する俺とて容易く殺されてしまいかねないのだ。

そして、まだまだ大きな問題がある。

――モンスターカードやトラップ・魔法カードは、俺の精神と肉体の二つの上限によって使用出来るカードが制限される。

この事が一番大きな問題であり、これを改善しない限りは魂に刻まれた力もゴミクズと変わらなくなってしまう。

例えば、今俺が召喚出来るモンスターは何かと言えば、攻撃力と守備力が１５０までという体たらく。

そして、人間の……いや、現状の俺の力を数値化すると大体攻撃力と守備力が共に5という感じなので、恐らく大人で１００くらいだろうと予想出来、しかも忍者となれば下忍でも５００、中忍で１０００、上忍で１５００相当になるだろうと思われるので、現状召喚出来るモンスターなど一般人相手にしか意味を成さないだろう。

この世界特有の力の源、チャクラ。

それはつまり、精神エネルギーと身体エネルギーを混ぜ合わせた物で、忍者ならば誰もが使えるエネルギー。

そのエネルギーを生み出す為に必要な精神と身体の両方を、この世界の忍者と同じく鍛えなければ、俺も必然的に十全に使えないのがデュエルモンスターズの力だ。

その事実を考えると、正直頭が痛くなってくる。

俺は畳の上に座った状態で、思わず両手でもって顔を覆う。

――チクショウ！　五歳児の手では顔も覆い隠せねェぞ！

心の傷を持つ者達の巻

この世界へと降り立ってからというもの、光陰矢のごとしと言える程にはあっという間に一ヶ月が経過した。

山積みの問題を抱える俺は、生き抜く為に直ぐ行動に移さねばならず、それはもう忙しい毎日だったのだ。

まず複雑な家庭環境を何とかしようと考え、原作にも登場したサクラ並みにピンクの頭髪が目立つ父親と、濡れて真っ黒になったような印象を持つ頭髪の美人な母親の二人へ「良いんだよ。僕に言ったあの言葉は、もう忘れて良いんだよ」と、それはもう優しく、本当に心底優しげな声音を意識して告げた。

赤子だった俺が覚えている筈が無いし、いつも黙って過ごしていた俺に突然話し掛けられた事で二重の意味で両親はビックリしていたが、俺の言葉を内心で反芻した後に滂沱の涙を流しつつ「覚えているの!?」とか「すまない、親として最低な発言だった!」とか「私達は許されざる人間なのよ!」とか、心底自責の念にかられる二人は終始泣き叫んだ。

まるで今にも自殺してしまいかねない二人を見て、俺はここが正念場だと認識して更に優しげに言葉を紡いだ。

「お兄ちゃんが突然死んじゃったんだよ、だから悲しみにくれて思ってもない事を叫んだとしても、それは本心じゃないと僕は知ってる。だっていつも、お父さんとお母さんは本当に悲しげな顔で僕を見てるのを知ってるから、それは身に染みて分かってるんだ」と、そう言葉を発した後に数拍の間を開け、二人の顔が更にクシャクシャになったのを見て「もう自分達を責めないで。もう苦しまないで。お父さんとお母さんには笑っていて欲しいから」と、そんな言葉で締め括った。

するとそれから日が暮れるまでの五時間、両親はずっと絶叫するかのような声音で泣き叫び続け、最後には声を枯らして言葉にならない思いを必死に吐露するかのように「ごえんなぁ！　だえな親で、ごえんなぁ!」と俺に抱きつきながら叫んだ。

そしてその後は、二人とも俺を抱きしめたまま気絶してしまい、俺は二人が風邪を引かないように毛布を掛けて上げ、この体の記憶では一度も無かった川の字で眠りについた。

その次の日、両親は全ての力を振り絞って泣き叫び続けたのが原因なのか、朝になっても起きる気配が全然しなかったので俺が簡単な朝食を作って二人を起こし、まだ俺に対して素直に対応出来ない二人と一緒に少しの緊張感が漂う朝食を摂った。

これがまず始めに俺がやった事であり、複雑な家庭環境を変える為にした精一杯の事だった。

しかしこれが功を奏したらしく、この一ヶ月の短い期間であっても着実に距離を縮められる一助となったのは間違いないだろう。

何故ならその証拠に、一ヶ月が経過した現在では少しぎこちないものであるものの毎朝の挨拶は当然のようにするし、毎晩の就寝時にも「お休み」と声を互いに掛けながら川の字で寝るようになり、尚且つ両親二人共に笑顔で過ごす時間が圧倒的に増えた。

俺としてはホッと胸を撫で下ろしたと同時に、これで気兼ね無く他の事にも集中出来るようになったと言えるだろう。

そして俺がやった事の二つ目は、この世界特有の力であるチャクラと、俺固有の力であるデュエルモンスターズの力を十全に使う為に必要な精神と身体の二つのエネルギーを鍛える訓練方法を発見する事であった。

しかしながら、これは実のところ原作でも描写されてあったので然程苦労はしてない。

座禅をしてひたすら動かない事で精神を鍛え、身体は運動する事で鍛えられるのだ。

故に、俺は午前中を身体トレーニングに重視し、午後は精神トレーニングに重視してこの一ヶ月を過ごしている。

少し距離感の縮まった両親には、うちの息子は何をしているのだろうと不思議がられている様子だが、忍者に憧れているのかなと、そんな風に生暖かい視線で見守られているのは内緒だ。

胸のつかえが取れた事が要因なのか、どうも微笑ましい目で俺を見

る事が増えたので、その結果俺がやる事なす事全てにニコニコとした笑みで眺めてくるので、ぶっちゃけ少し恥ずかったりする。
そんなこんなのこの短いがあっという間の期間の努力の結果は、自身でも驚くべきものだった。
両親や隣近所の目がある場所でモンスターを召喚出来ないのであくまでも感覚的なものなのだが、恐らく攻撃力・守備力共に１５５まで数値が伸びたように感じるのだ。
それはつまり、たった一ヶ月で５も数値が伸びた事を意味する。
たった５しか伸びなかったと思うか、それとも５も伸びたと思うかは人それぞれだろうが、自分としては５も伸びて心底嬉しかった。
それはもう自然と踊ってしまう程で、今や懐かしいパラパラを踊ってしまった程だった。
因みに、その踊りを両親に見られていたのを後々知って、何故自分はコナン君ばりに踊ってしまったのかと真剣に悩んだのは今日の早朝の事である。
――まだ生暖かい視線を感じる……！
早朝の踊りを見られてからというもの、そしてそれを昼間に指摘されてからというもの、ずっと感じる両親の視線から逃れるように気分転換も兼ねて家を脱出。
普段家を出る時はランニングくらいでしかなかったので、こんな風に出るのは初めてだ。
まるで京都を彷彿とさせる街並みを眺めつつ、俺はいつもとは違ってゆっくり歩いて進む。
宿屋、甘味処、駄菓子屋、八百屋等々の店が軒を並べていたり、ちょっと変わっている店では焼肉屋とか、こんな店もあるんだなぁと感心しながら脳内で地図を作成して行く。
で、そうしていると何やら剣呑な雰囲気の怒鳴り声が響く一角に辿り着いた。
何が起こっているのだろうかと野次馬根性丸出しで人波を掻き分け進むと、焼き鳥屋と思われる屋台の目前で、俺と同程度だと思わしき年齢の金髪少年が沢山の大人から罵声を浴びせられているのが目

に映った。
――あの特徴的な頬の三本線って……。
今にも泣きそうな少年は必死に涙を堪えているのか、とても幼子とは思えぬ表情で歯を噛み締めている。
俺はそれを見て、大きく溜め息を吐かざるを得なかった。
四十代や五十代の男女が、子供に向かって「里から出て行け！」とか「死ね！」とか言っているのを見させられると、溜め息が出ても不思議ではなかろう。
きっと身内や親しい人を亡くしたのだろうから深い悲しみもあると察せられるものの、かと言ってナルトが何かした訳ではなかろうに。
見るに耐えないとはこの事だ。
ナルトを罵る大人達の顔が、俺には酷く醜いものに見えた。
「おじさん、焼き鳥二本頂戴。タレ多めで」
声高々に罵倒している大人達と涙を必死に我慢しているナルトの間を、俺は態とらしく横切って進むと焼き鳥屋の店主に注文した。
その空気を一切読まない俺にポカンと口を開けて呆ける店主だったが、俺が「早くしてくれる？」と声を発すればパパッと二本の焼き鳥を差し出してきた。
それ故、俺は適切な料金を支払う。
その後、視線が俺へと集中する事で静かになった大通りの中、一口焼き鳥を口に含んで焼き鳥の感想を呟く。
「おぉ、結構上手いな！　うん、まずまずだ！」
俺の言葉が静かな大通りに木霊するくらいには静かになっているが、俺はそれを敢えて気にした素振りも見せず、俯いて地面へと視線を向けていたナルトに近付いた。
すると俺の足が視線に入ったのか、ナルトがクシャクシャの顔で俺へと視線を向けてきた。
「なかなか上手いよ。ほら、食べてみ」
怒りではなく、笑顔でもなく、そして泣き顔でもなく、この場に居る誰にも当てはまらない普通の表情を意識してナルトへと焼き鳥を

差し出しながら声を掛けた。
こんな突然意味不明な感じで話し掛けられたのが原因なのか、ナルトは非常に困っているみたいに見える。
だが俺はそれを無視して、無理矢理ナルトの手に焼き鳥の串の持ち手を掴ませると、これまたナルトの手を無理矢理掴んで歩き出す。
目指す先は、自分でも不明。
しかしこの場より良い雰囲気の場所がある筈だと思い、俺は戸惑うナルトを引っ張って行く。
すると俺に向かって誰かが叫ぶ。
「ちょっと、その化け物に関わるのはやめときなさい！」
「そ、そうだそうだ！　ろくな事がねェぞ！」
我に正義あり、とそんな考えがあるからだろうが、誰かが叫ぶと次々に大人達が叫んだ。
故に俺は、足を止めて声のする方へと振り向き口を開く。
「誰の為にこの子を責めてるの？」
俺の問い掛けに、大通りに集まる人達は誰も答えない。
ならばと、俺は更に言葉を紡ぐ。
「皆に家族は居る？　家に帰ったら大切な人は居る？」
問い掛けるが、やはり俺の問いには誰も答えず、俺の質問の意味を図りかねているのか誰も彼もがポカンとしていた。
「家に帰って大切な人を抱き締める時、自分は小さな子供を罵倒してやったと自慢するの？　自分の子供を抱き締める時、皆は罪悪感を抱かないの？　自分は誇れる事をしたのだと、自分の愛する人達に言えるの？」
今なら誰かが箸を落としたとしてもその音が響くだろう大通りに、俺の言葉は不思議な程に響き渡った。
そして誰もが俺の視線から逃れるかのように、視線を地面へと俯かせた。
その姿はまるで、罵倒されていた時のナルトのようで、俺はそれ以上何かを彼らに言う必要は無いだろうと悟り、ナルトの手を引いて再び歩き出した。

初めての召喚の巻

ナルトと偶然遭遇してから早くも二週間が経過した現在、俺は相変わらずの日常を過ごしている。

とは言え、毎朝のトレーニングには知り合ったばかりのナルトも加わる事になった。

何故朝のトレーニングだけなのかと言うと、午後のトレーニングである座禅がナルトからするとつまらなかったらしく、大層お気に召さなかったからだ。

子供なら当然と言えば当然なのだろうが、体を動かすのは好ましくても、動かずジッとするというのは無理のようだった。

ともあれ、毎日のトレーニングに道連れが出来たし、俺としては充分満足である。

それに、原作のナルトよりも強くなる可能性もあるだろうし、一石二鳥とは正にこの事だ。

ただし、懸念事項が新たに生まれてしまった。

あのナルトとの初遭遇の後、俺はナルトを両親に引き合わせた。

すると、両親は良い顔をしなかった。

当然で必然だと言えるだろう。

何故なら、両親が愛情込めて育てていた愛すべき兄ムジロは、ナルトの中に封印された九尾によって殺されたのだから。

しかし、それはあくまでも九尾がやった事。しかも写輪眼で無理矢理やらされた事なのだ。

それ故、ナルトには無関係の事柄である。

だがそれを両親は知らないし、前者の部分でも充分怒りを持っていて当たり前だと言えるので、両親としてはナルトを目前にして好意的な目で見れる訳も無かった。

だからこその初対面時の反応となるのだが、俺はナルトを家に上げ居間で寛いでいるように言い付けると、俺は両親を伴って寝室へと移動して「ナルトはナルト、九尾は九尾。ナルトと九尾は別物だよ」と、そう発言した。

すると当然、人柱力の事など里では禁句になっているのに何故俺が知っているのかと、両親は口にはしないが猛烈に困惑していた。
里内でナルトが人柱力であるのを知っているのは、中忍以上の者、そして九尾が暴走した時に成人していた大人達だけなのだから、俺が知っているのが分かって困惑するのは当然だ。
でも俺はそれには触れず、「ナルトが大勢の人達から罵詈雑言を浴びているのを見た。大人達の顔は、とても見ていられない程に醜かった」と、そう困惑する両親に向かって告げると何も言わず辛そうな表情に変化した。
それを見て俺は、両親も本心では理解しているのだろうと、そう悟った。
だからこそまだ言うべきだと思い、俺は更に言葉を紡ぐ。
「ナルトは英雄だよ。ナルトが器になったから、だから僕達は今も生きてられる。四代目もきっとそう考えればこそ、ナルトを器にしたんだよ。でなきゃ自分の子供を器になんてしない」と、出来るだけ優しい口調を意識して両親へと自分の考えを述べた。
すると両親は、驚愕と困惑がない交ぜになった表情を俺に向け、小さく「四代目の……？」と呟いた。
驚愕は四代目の息子がナルトという事に対してで、困惑は上忍である自分達ですら知らない事を何故五歳児の俺が知っているのかという事なのは明白。
だけど俺は、何故俺が知る術も無い事実を知っているのかという疑問には一切答えず、「ナルトに対して優しくして何て、そんな事を言うつもりは無いよ。でも、お父さんとお母さんには里の皆みたいに最低な人達にはならないで欲しい」と、そんな風に一方的に告げた。
そうして俺は会話を切り上げ、居間で心細くジッと待っていたナルトの隣に座り、トレーニングに参加しないかと持ち掛けたのだ。
それから二週間、両親はナルトを見ても冷たい眼差しをする事は一度として無かったものの、俺には問い掛けたいが問い掛けて良いものかと躊躇っているのが現在で、俺としては言い訳が思い付かず黙し続けている。

流石に居たたまれない。
大きな溜め息が座禅をしている自分の口から知らず知らず出てしまい、咄嗟にその溜め息を吐いた姿を見られていないかと同じ居間に居る両親へと視線を向ける。
すると、少し滑稽だがキョトンとした表情の両親とバッチリ視線が合ってしまう。
「どうかしたのか？」
「ゲンセイ、何か聞きたい事でもあるの？」
ピンクの頭髪の父親と黒い頭髪の母親は、俺の懸念とは別に微笑ましいと言いたげな表情で尋ねてきた。
その表情を見せられた俺の立場からすると、居たたまれないと思っていた俺の心にクリーンヒットするものがあり、余計に罪悪感が増してくる。
今は四代目の事は追及するつもりが無いようだが、再び疑問が脳裏を過った時は疑問の眼差しを向けられるだろう。
――これはもう早めに話した方が得策なのでは？
上手い言い訳は思い付いていないが、俺の能力を暴露すれば辻褄も合う。
出来るだけ話さない方が無難だというのは理解しているのだが、両親なら口止めをすればきっと第三者に話さないだろうし、そう考えると話す方が良いような気もする。
能力を使用する時のアドバイスも貰えるかもしれないし、味方になってもくれるだろうし。
そんな風に考えつつ両親の顔を見つめ、俺は意を決して口を開く。
「何で僕が九尾の事を知っていたのか、そして何で上忍のお父さんとお母さんが知らないナルトの父親の事を知っていたのか……それを今から説明しようと思うんだ」
俺がそう告げると、両親の表情は一変。
両親が生唾を飲み込む音が、静かな居間に響く。
「僕が知り得る筈の無い事実を知っている理由は、見聞きしたからだよ。ナルトの中に封印される九尾の姿も見たし、ナルトの父親である

四代目と母親であるうずまきクシナさんが、泣きながら最後の言葉を息子であるナルトに伝えているのを見たからなんだ」
　再び生唾を飲み込む音が、静かで緊張感漂う居間に響いた。
　そして数拍の後、父親であるムゲンが信じられないと言いたげに口を開く。
「そ、そんな筈は無い。あの災厄の日、確かにお前は存在していたが……しかし、お前は零歳の赤子だったんだぞ」
「その通りよ。あなたは歩く事はおろか、寝返りさえ満足に出来なかったのよ？」
　父親のムゲンに続いて、母親であるミルが続けて言葉を発した。
　二人の表情は真剣そのもので、まるで俺を窘めるような口調だ。
「うん、確かにお父さんとお母さんの言う通りだ。でも、僕は実際に見聞きしてるんだよ。ナルトに九尾が封印されたあの場所に、僕は居なくても僕の目と耳の代わりになる僕の僕（しもべ）が、僕の代わりに見聞きしてたんだ」
「「代わりに……!?」」
　話の内容に驚愕し目を見開く二人に向かって、俺は指を鳴らすと同時にデュエルモンスターズで最もポピュラーなモンスターを呼び出す。
　パチンと響く音が木霊し、その次の瞬間にはテーブルの上に攻撃力３００・守備力２００のクリボーが音も無く姿を現した。
　丸々っとした体型と同じく丸々とした目が特徴で、ステータスとは裏腹に非常に役立つ効果を持つ事で有名なモンスター。
　実はこのモンスター、攻撃力から分かる通り、ナルトに出会った日まではとても召喚出来ないモンスターだったのだが、何故かナルトと遭遇した次の日に上限だった１５５という数値が倍近くも上昇して、俺自身も理由は不明だが何故か召喚出来るようになっていた。
　ナルトと遭遇した次の日の朝、目が覚めた瞬間その事実を感覚で理解して、困惑しつつも嬉しくて色々な感情が混ざり、喜んで良いのか悩めば良いのか困った事を覚えている。
　ともあれ、愛らしくもこの世界には存在しない生物を目前にした両

親は、流石は上忍と思える素早い動作で身構えた。
しかもどこから出したのか、両親二人の右手にはクナイが妖しくも不穏な光を放っている。
「この子の名前はクリボー。僕の言う事を聞く僕(しもべ)だから、危険は無いよ」
「クリクリ～」
大丈夫だよ～と両親へと告げているのか、クリボーは俺の発言の後に両親に向かってつぶらな瞳を見せつつ鳴いた。
正直言うと俺も初めてモンスターを召喚したのでビビっているが、ここは毅然とした態度で居るのを心掛けなければならない。
そんな俺の態度を見て、両親は警戒を解いて少しクリボーから距離を取りつつ、俺へと近付くとクリボーと俺の間に入ってきた。
多分、俺を守ろうとしてくれているのだろうが、俺の力で召喚したので大丈夫な筈だ。
「こ、これは口寄せなの？」
「いや、ゲンセイは口寄せの印を結ぶどころか、指を鳴らしただけだ。それでは口寄せなど出来んし、何より口寄せは契約しなければ絶対に出来ない類いだ」
「そう、そうだったわね。でも、それならどうしてゲンセイが口寄せに似た術を使えるというの？」
両親二人共に上忍なのだから、それぞれが互いに口寄せについての知識が深くて当然。
その一方で俺はというと、原作で描写された部分しか知らないので深くまでは分からない。
だが、ナルトが口寄せ契約を結ぶ瞬間の描写を見ていたので、その部分だけは理解出来る。
だから訳知り顔で小さく何度も頷いていると、両親は俺へと視線を向けてきた。
「この……クリボーってのは、どうやって口寄せしたんだ？」
「いえそれよりも、口寄せ契約をいつどこで結んだの？」
「この子は口寄せで呼んだ訳じゃないよ。それに、僕は口寄せ契約を

した事なんてないし、赤ん坊だった僕が契約出来る訳がそもそもあり得ないよ」
俺の言葉を聞いて、二人共に「確かに」と呟きながら頷く両親。
俺は更に言葉を続けて説明する。
「クリボーは精霊っていう種族なんだよ。それで、精霊は精霊界って場所で暮らしてるんだけど、僕はその精霊界に住むクリボーや他の精霊をこの世界に呼び出せるんだ」
精霊、精霊界というワードを聞いた両親の脳内では、きっと疑問符が大量に浮かんでいるのだろう。
それ故に本気で意味が分からないと言いたげに渋面を浮かべ、二人共に首を傾げている。
そんな二人の反応が少し面白くて、俺はちょっと笑いながら尚も説明を続ける。
「精霊界っていうのは、この世界とは別次元の世界の事だよ。そして精霊っていうのは、生物とは少し違う超常の存在って意味なんだ」
「「な、なるほど……？」」
十全に理解した訳ではないが、それでも多少は理解したのだろう。
二人の表情は先程浮かべていた渋面とは違って、今は分かるような分からないような、とそんな感じの表情に変化している。
「僕はこのクリボーの目や耳を通して、遠く離れた場所でもクリボーが見聞きしたものを自分で見聞きするかのように見て聞く事が出来るんだ。だから四代目がナルトに九尾を封印する際、僕は呼び出したクリボーによってその時の様子を知る事が出来たんだよ」
「……そういう事だったのか」
「まるで口寄せのようでいて、血継限界のようでもあるのね」
どうやらこの説明で納得してくれたのか、両親二人は心底感心したように大きく頷いた。
それにホッとした俺は、呼び出してずっと放置しっぱなしのクリボーを撫でて内心でお礼を述べる。
――クリボーのお陰で上手く誤魔化せたよ。ありがとう。
「クリクリ～」

まるでクリボーが「どういたしまして」と、そんな風に愛らしい姿で言っているような気がした。

ナルトに続いて二人目の友達が出来ましたの巻

両親に自分の力を告白してから二年が経過した現在、俺は一日も休まず特訓の日々を過ごしている。

忍びが使う忍術は一つも覚えていないが、それでも精神と身体のエネルギーは大幅に増えており、今では召喚出来るモンスターや使用出来る魔法・トラップカードの類いが多くなっていた。

しかしながら、下忍に何とか対抗出来る程度のものでしかないと思うと、正直言って不安しかない。

だが、両親が口寄せの印を教えてくれたのもあり、俺が人前でクリボー達を召喚しても変じゃないようにはなったので、その辺は慎重になる必要が無くなった事は確かだ。

もっとも、だからと言って人前で召喚した事は一度として無いが。

ともあれ、そんな事情はさておき、一ヶ月前から忍者アカデミーに通う事になったのでその話をしておこう。

忍者アカデミーとは、その名前の通りに忍者になる為の基礎体力や基礎忍術を学ぶ場所で、中忍という役職の先生から沢山の技術を学ぶ学校である。

流石は中忍というだけあり、やはり全ての先生が高い身体能力や高度な忍術を身に付けていて、そのせいか教えるのが非常に上手かった。

原作を知っていてもチャクラとかチンプンカンプンな俺にも、すぐ理解出来るように噛み砕いて説明してくれる先生には頭が上がらない。

まだ忍術とかは教えて貰ってないものの、チャクラの練り方は分かった。

で、その事が嬉しかった俺は、意味も無く四六時中チャクラを練ったりしている。

そんな嬉々として学校に通う俺が新たに知り合った者達の中に、主人公であるナルトと同じく非常に大きな役割を持つ人物にも出会った。

名をうちはサスケ。写輪眼という稀有な血継限界を有するうちは一族の、悲しき復讐者となる人物だ。
まだうちは一族は滅びていないので、現在のサスケ自体は素直になれない少年と言った感じで可愛らしいが、兄のイタチによってうちは一族は滅びてしまうので、そうなった時には唯一の生き残りであるサスケは今のサスケとは大きく異なる人間へと変化するのだろう。
こんな小さな子供が経験して良いような事柄ではないし、そう考えればこそ放っておけない。
肉体は子供だが精神は大人である俺からすると、何とかして助けてあげなければならないだろうと思っている。
一族全員というのは無理だが、せめてご両親は助けてやりたい。
否、ご両親だけは絶対に助けなければならないのだ。
俺はサスケをアカデミーで見た時、そう決意した。
それは兎も角、俺は他にも様々な人物に出会っている。
奈良一族のシカマルを始めとした原作に登場する面々で、元気一杯な者達だ。
ぶっちゃけると元気一杯過ぎてしんどい事も多々あるものの、見ていて微笑ましいとは思う。
だが、そんな微笑ましい事は脇に置いておいて、驚愕したのは全員が何かしらの忍術を既に習得している事だ。
俺のようにチャクラすら練れなかったのは一握りであり、原作に登場する者達は全て何かしらの基礎忍術を一つは習得しているのには驚くどころかドン引きである。
流石はエリート一族達と言ったところなのだろうが、まだ幼い彼らが基礎忍術とは言え、確かに忍術を使える事に俺としては呆然とさせられた。
だが俺は決して焦ったりはせず、相も変わらず精神と身体エネルギーの上昇に研鑽を積んでいる。
やはり焦ってもどうしようもないし、何より自分の強みはデュエルモンスターズの力であると理解しているのだし、そして忍術の力の源であるチャクラですら、デュエルモンスターズと同じく精神と身体エ

ネルギーの二つが大きく作用するのだから、ここは焦らず基礎を鍛えるのが近道だと判断した故である。
そんな俺が今何をしているのかと言えば、自宅で母親が作った食事を、家族とナルトやサスケを含めた面々で食べている真っ最中だ。
今日はアカデミーが休みで、だからこそサスケとナルトを自分の修行に誘った……いや、道連れにした後の昼食中という訳である。
二人共に肉体トレーニングは余裕で熟していたので、この後の座禅も楽しみだ。
朝のトレーニングは余裕で熟す姿を見て嫉妬させられたが、午後のトレーニングはどうなるかと考えると笑みが零れる。
――精々苦しむと良い……！
まるで悪役のボスになったような心境の俺が、ニヤリとそれらしい笑みを浮かべると、両親が「ブフッ！」と吹き出した。
うちの子は変わってるなぁと思っているのがありありと察せられるが、これはもう日常のヒトコマとなっているので俺は気にしない。
因みに、現在の両親は昔とは違って普通の家族らしく仲良く出来ている。
「あのさ、あのさ！　午後はどうすんの?!」
「手裏剣術の修行しようぜ！」
最初にナルト、次いでサスケが満面の笑みで言い募ってくるが、お前達の期待には答えられないと言っておこう。
何故なら、俺はデュエルモンスターズの力があるから近接戦闘はモンスターに任せ、俺は弓を使用して遠距離からの戦闘を心掛けるつもりなので、中距離で使用するクナイや手裏剣は使うつもりが無いのである。
まぁ、嫌でも中距離戦になる時もあるだろうから、クナイや手裏剣術も覚えて損は無いとも思うけど。
「午後は座禅だよ」
「なっ……!?」
二人の反応を見て、再び俺はニヤリとそれらしい笑みを浮かべる。
すると再度、両親が俺の浮かべた表情を見て「ブフッ！」と吹き出

すが、俺はあえてそれを無視して言葉を続ける。
「集中力が増すし、精神エネルギーが増えるからね。座禅は良い事づくめだよ」
「い、嫌だ！」
「そ、そうだ！　それに、手裏剣術だって集中力が増す筈だ！」
「甘いね、砂糖に蜂蜜を混ぜたくらいに甘いよ。確かに手裏剣術でも集中力は増すだろうけど、座禅程には効果が高くない。
故に、午後は座禅に決定だよ」
「い、嫌だ！」
全力で拒否する二人だが、俺が優越感に浸る為の犠牲になって貰わねばならん。
だからこそ、俺はここぞという場面で、両親は別として他の人には誰にも見せていなかったデュエルモンスターズの力の一端を見せるべく、残り少なくなっていたご飯を掻き込むと立ち上がる。
そして、内心で力を込めて叫ぶ。
――魔法カード、サラマンドラ発動！
内心で魔法カードの名を叫んだ直後、俺は口寄せの印を結んで然も口寄せしたかのように偽って巨大な剣を呼び出す。
その剣は少々の炎を纏わせながら出現し、俺の手へと姿を現した。
このサラマンドラという魔法カードは、攻撃力を７００上昇させてくれる魔法カードになるのだが、この世界ではただ攻撃力を増すだけではなく、炎を操れる剣として扱える歴とした武器である。
しかも、俺だけが使用出来る特殊な剣であり、俺以外が持とうとしても決して掴む事が出来ない不思議な武器。
そんな武器が現れて、ナルトとサスケの二人は目を見開いて呆然としていた。
「座禅を何時間でも余裕を持って出来るようになれば、こんな強力な武器も使えるようになるよ」
「スゲェ!!」
「この剣の凄さを少し見せてあげるから、庭に行こう」
俺の提案に否はなく、二人は目をキラキラと輝かせながら素直に従

い庭に出る。
そして俺はそんな二人を背にして、サラマンドラを上段に構えて一気に振り下ろす。
すると、サラマンドラが纏う炎が勢い良く一体の蛇のように素早くうねりながら前方にあった岩へと直撃し、ゴウッと盛大な音と共に火柱を上げた。
恐らく、火遁業火球の術くらいの威力はあると思うのだけど、初めてやった己の所業にちょっとビビってしまったのは秘密である。
自分が予想していたのより遥かに威力が高かったのが原因なのだが、迫力が凄まじくて少し腰が引けてしまった。
それを出来る限り押し隠し、俺は余裕そうな笑みを意識して浮かべ二人に視線を向ける。
「スゲェ……！」
「兄さんみたいだ……！」
ナルトの反応は別として、サスケの言葉には否であると言いたいが今は良しとしておこう。
さぁ、座禅を始めようではないか。
そうして始めた座禅では、二人とも十分も集中力を保てず、俺の優越感を満たしたのは満足だった。
ただ、もう一度サラマンドラを見せろと言い募る二人のせいで、俺の午後のトレーニングが出来なかったのは予想外であった。
──午前のトレーニングは別としても、午後のトレーニングにはもう絶対呼ばねェ！
そう内心で誓う俺を、誰が責められようものか。

イタチの凶行の巻　上

今日も今日とて己に課した修行を行った俺は、布団にくるまって横になっている。
平日は学校があるので、起きてすぐに肉体トレーニングを一通り行えば学校へと通い、学校が終われば家で弓やクナイ・手裏剣の投擲術を修練し座禅をするという毎日。
休日の午前はナルトとサスケを含めて肉体トレーニングを行い、午後は一人孤独に座禅と弓やクナイ・手裏剣の投擲術を訓練。
そんな毎日を過ごす俺の日常は、驚く程に充実した気分をもたらしてくれている。
だが、勿論、それだけをしながら毎日を過ごしている訳ではない。
デュエルモンスターズの力を十全に使う為のトレーニングも当然行っているのだ。
夜、俺は布団の中へと潜り込むと、クリボーを召喚して里内を散策させている。
これは召喚したモンスターの目や耳を通して、自分の目で耳で見聞きするのと同じ効果も持つので、モンスターを意図的に操作してまるでゲームでもするかのような要領で訓練しているのだ。
里の地理を把握するのにも良いし、勿論モンスターを操作する訓練にもなるし、何よりもうちは一族の動向をチェックするのに非常に役立つのである。
そうした毎日を送っていると、必然的に色々な事を見聞きするに至り、後数ヶ月……いや、後数週間の内にイタチによる凶行が行われるだろうと悟った。
何故なら、うちはシスイが殺されたのだ。
この出来事がイタチの凶行を決定付けた事であり、最早イタチとしては動かざるを得なかった事を明確にした事柄であるのは誰もが知るところ。
それ故に俺は、ここ数日はクリボーを二体召喚し、他にはクリボーと同じく効果を持つモンスターである人食い虫を二体とハネクリ

ボーを一体召喚してうちは一族のテリトリーをパトロールさせている。
俺が意図的に操れるのは聖徳太子でもないので一体のみなのだが、モンスターにはモンスターの自我が存在するので、別に俺が召喚してる間は四六時中コントロールしていなければならない訳でもないので、最初に簡単な命令を出しておけば問題にはならない。
故に、最初にモンスターを召喚した時点で、俺はモンスター達に適切な命令を出してパトロールさせているので、もしも今イタチが凶行に走ったとしても適切な行動をモンスターは選択してくれる。
そんなこんなで、俺は召喚していた内の一体であるクリボーを操りながら、トコトコと人目に付かないように注意しつつ夜闇の中を移動していた。
今日は何も起きないのかもしれない、とそう思う程には静かな夜。
しかし、何気無く夜空を眺めた俺の目に映った物を見て、その瞬間身を強張らせた。
何故なら、夜空にデカデカと満月が浮かんでいたからだ。
それを見て、俺は原作をはっきりと思い出したのである。
イタチが凶行に走った夜、その夜には満月が浮かんでいたのが描写されていた筈。
それを思い出したからこそ、俺は思わず身を強張らせたのだ。
――今日があのイタチによる殺戮の日かもしれない！
一度そう思ってしまえばそれ以外には考えられず、俺はクリボーを操って早足でサスケの家へと向かう。
イタチが今まさに暴れているのかもしれないと考えつつも、まるでどこか現実感が無く、しかし不自然な程に俺の心臓は早く脈打つ。
そうやって数分が経ってうちは一族のテリトリーへと辿り着いた瞬間、何処からか金属同士のぶつかる甲高い音が響いているのに気付き、そして辺り一帯に漂う鉄錆びの匂いを感じ、俺は確信した。
やはり今日なのだ。今日という満月が浮かぶ夜闇の中、うちは一族はサスケを残して全滅するのだ。
――クソッ、他のモンスター達はもう適切な行動へと移しているの

か?!

自分が操るクリボー以外の他のモンスターを思いつつ、俺は俺で急いでクリボーを操作しながらサスケの家へと精一杯の速度で向かう。

最弱モンスターとして有名なクリボーであるが、一般人のステータスより三倍程はステータスが高いので、そこそこの速度で地面を駆けつつひた走る。

その途中で幾人かの忍び装束を着た者達が死んでいるのを横目にし、やはり既にイタチは動いているのだと確信した。

──オビトも居るのか？　特殊効果でやり過ごそうと考えているが、オビトとイタチという二人の化け物を一度に相手にしたとしたら、流石に特殊効果があっても通用するとは思えない……！

クリボーやハネクリボー、そして人食い虫の特殊効果は、優秀ではあっても初見の者ぐらいにしか通用しないだろう。

それに相手は化け物もかくやと連想させる者達となるのだから、そう思うと余計不安が募る。

しかし、俺が召喚出来るモンスターの中で唯一今回のシチュエーションで生存率が高いと考えたモンスターなので、俺には他にどうしようもないのも事実。

かなりの不安に苛まれつつも精一杯の速度で走る俺（クリボー）が漸くサスケの家に辿り着いた時、「やめなさい、イタチ！」と悲痛な叫び声が響いた。

この声は一度聞いている。間違いなくサスケの母親。

その事に気付き、意を決して中へと入ろうとした瞬間、召喚して独自に動くよう指示していたモンスター達が近くまで来ているのを俺（クリボー）の鼻が察知する。

心強いと、心底そう思える俺は再度意を決してサスケの家へと侵入。

足音などこの際無視して、ドタドタと盛大に響かせながら廊下を進み、道場のようになっている一室へと入った。

すると片腕を失ったサスケの父親が、自身の妻を守るかのように大きな背に隠し、残った手にクナイを握り締めている姿が俺の目に映っ

た。
「……口寄せの獣か？　誰の差し金だ？」
クリボーという見た事も無いだろう不思議な生物を目にした者達は、呆然としている。
しかしイタチだけは冷静で、思案するかのような表情で独り言た。
「クリクリ～」
これは別に俺が喋った訳ではなく、クリボーが自主的に喋ったのだが、恐らくその意味は自己紹介でもしているのだろうと察せられる。
クリボーって召喚していて気付いたけど、シチュエーションとか考えないような感じでちょっと天然っぽいんだよ。
まぁ、それは兎も角として、俺に出来る事はやらせて貰う。
大人の男として、子供が悲しみに暮れる姿を見たくはないのでね。
「クリクリ～！」
またこの場のシチュエーションには不釣り合いな愛らしい声が響くが、クリボーの声や容姿とは異なってクリボーを操る俺が取った行動は凶悪そのもの。
イタチ目掛けて、床を蹴り跳び上がったクリボーが容赦無く鋭い爪を使用して回転切りを放った。
しかし勿論、上忍の中でも暗部に入る程の実力者であり、その暗部の中でも飛び抜けて強者であるイタチには通用する筈も無い。
簡単に横へとステップする事で避けられ、俺（クリボー）を仕留めんと反撃のクナイを投擲してきた。
これはクナイを投擲してきた者の力量によるが、時速２００キロを越えるスピードで投擲されれば攻撃力３００守備力２００のクリボーでは避ける間も存在しない。
故に殺られた、とそう思った俺だったのだが、サスケの父親であるフガクによって、イタチが投擲したクナイが同じくフガクの手に持つクナイによって打ち落とされた。
それを認識してホッと胸を撫で下ろす俺だったが、その瞬間もイタチは行動していたらしく、いつの間にかフガクの妻であるミコトの傍に立って新たなクナイを振り下ろそうとしているのが俺の目に映っ

た。

――ヤバい!?

あまりの動きの速さにとても此方は対抗出来るものではなく、俺は呆然とスローになった光景を眺めるしかなかった。

しかしそれは俺だけであり、フガクはイタチ並みに動けるようで素早い動きでもってイタチに蹴りを放ちミコトを救出。

次いで何やらフガクが呟いた瞬間、フガクとフガクに蹴られて吹き飛んでいたイタチの両者が、先程までの動きが嘘のようにピタリと動きを止める。

俺はそれを不思議に思い、何気無くフガクへと視線を向けてその不可思議な現状の理由を察した。

何故なら、フガクの目が……写輪眼が通常の形状とは違うものへと変化していたからだ。

――あれは、万華鏡写輪眼?!

イタチの凶行の巻　中

――フガクも万華鏡を開眼していたのか!?

俺の知る限り、フガクが万華鏡を開眼していたという描写は無かった筈だ。

ただしそれは俺が漫画を読んでいたナルト達がカグヤを倒すまでのストーリーの中の事なので、その後に語られた新たな部分において隠されたストーリーとしてフガクの万華鏡も描かれていた可能性がある。

とは言え、だ。フガクの万華鏡がどんな効果のものなのか俺は知らないので、このまま両者が静止した状態を眺めていて良いのか不安だ。

今のうちにイタチに攻撃してみるべきか、しかし攻撃する事でフガクが行っている何かしらの瞳術が解けてしまうかもしれない可能性も存在する。

そう考え始めるとやはり迂闊に行動する事が憚られ、俺はジッとただ見つめるしかなかった。

しかしそれも束の間、フガクが突如苦しげな声を上げて倒れ込めば、次いでイタチの目がミコトへと移り、するとミコトも同様に苦しげな声を上げてやはりフガク同様に倒れ込む。

俺には何が何やらさっぱりなのだが、恐らくフガクが写輪眼という万華鏡の瞳術合戦で負けたのだろう。

そう認識した俺に、イタチが万華鏡へと変化させた瞳を向けて口を開く。

「三代目から密命を受けた者なのか?」

俺(クリボー)を放った者へと呟かれた疑問の言葉なのだろうが、イタチの声は少し苦しげな様子に思えた。

多分、万華鏡を使用した反動もあるのだろうが、それ以外に何やら悩んでいるように俺には思えた。

「やはり三代目には事後報告する事を選択して正解だったな」

大きく、それもゆっくりとした様子で溜め息を吐くイタチは、額に

浮かぶ汗を拭うと更に言葉を続ける。
「俺の目の前に居る獣を放った者よ、何処からか見ているのだろう？
悪いが邪魔をしないでもらおうか。一族を滅ばせねば、里が壊滅しなかねないのは知っている筈だ。
……それに、根の者とは取引が済んでいるしな。無論、一族を滅ぼした後は三代目に直接お会いして報告もする。俺の望みを聞いて貰わねばならん事もあるしな」
イタチの言っている事の内容は、原作を知っている俺には全て理解出来た。
根の者との取引とは、それはつまりクーデターを企むうちは一族を滅ぼす事だろう。そして三代目に対する報告と望みとは、根の者との取引の事の報告やサスケを守って欲しいという個人的な頼みの事であるのは明白。
里を守る為に一族を滅ぼした悲しき男。弟を守る為に根の者を脅し、里のトップに弟の命を守って欲しいと頼む悲しき男。
本当ならイタチも救ってあげたかった。他のうちは一族の者達については、術の研鑽だけで心を鍛える事を疎かにし、その結果傲慢になってクーデターを企むような面々なのでそれ程に感慨深いものは無いが、やはりイタチは救ってあげたかったと心底思う。
だが、俺に出来るのは少しの事だけであり、望む全てを叶えられる程に強く万能ではない。
故に、どうか許して欲しい。
でも、それでも、最悪の未来よりは少しでも明るいものへと俺が変えてやると誓うから、これからする事をどうか許して欲しい。
「……返答は無いが、獣が動かぬという事は理解してくれたと受け取って良いのか？」
俺を警戒しつつも、姿の見えないクリボー（クリボー）を放った術者である俺へと声を投げ掛けるイタチ。
そんなイタチに心の中で何度も許しの言葉を吐く俺は、サスケが此処に駆けて来ているのを匂いで感じ取り、そして俺が事前に放っていたモンスター達がもう身近にまで来ているのを同じく鼻で感じ、サス

ケがこの一室に入った瞬間行動に移した。
「父さん、母さん！」
サスケが床に倒れ込んでいる御両親を視認した直後、悲痛な声で呼び掛けた。
それと同時に俺は床を蹴り、フガクとミコトが倒れている場所まで移動し、イタチと倒れ込む二人の間に割って入る。
「兄さん、何でこんな事を!?」
「己の器を図る為。己の力量を試す為」
「ふざッ……ふざけんなァッ!!」
倒れて動かない二人へと駆け寄ったサスケは、イタチへと怒りの形相で叫び駆けた。
俺を無視して話が進んでいるが、サスケの場合だと俺が誰かの口寄せであり仲間だと思ってるからだろうが、イタチは俺が立ちはだかるように割って入ったが大して障害にならないと理解しているからだろう。
しかし、それは大きな間違いだと言いたい。
確かに俺はサスケ達の見方なのでサスケが俺を無視するのは良いが、イタチの認識は少し間違っているのだという証拠を見せ付けてやる。
「シャァアーーーー!!」
「クゥーーーー!!」
道場のような一室の引き戸をぶち壊して、モンスターである人食い虫とハネクリボーが乱入。
それを事前に察知していたのか、イタチは然程驚きもしないが、サスケは新たな乱入者に戸惑い足を止める。
俺はその隙に、サスケを短い手で拘束すると共に床に倒れているフガクとミコトの所まで無理矢理移動した。
そして人食い虫の一体が特殊効果を発揮して、先程まで目に見えぬ程に素早く動いていたイタチと同レベルの速度でイタチへと接近し、人食い虫の名前に恥じぬ行動を取る。
大きな口でイタチの頭へと齧り付いたのだ。

しかし、その特殊効果ですらイタチという化け物からしたらそれ程には脅威とはならないらしく、恐らく影分身の術を使用して変わり身の術としたのか、人食い虫が自身の命を犠牲にして使った一瞬の戦闘力上昇は無駄に終わった。

だが、人食い虫はもう一体いる。

命を犠牲にして特殊効果を発揮し影分身を補食した人食い虫が音も無く霞のように消え去ると、残っていた人食い虫が再び命を犠牲にして同様の特殊効果を使用する。

俺(クリボー)はそれを眺めつつサスケを床に倒れ伏す二人の所で拘束し続け、ハネクリボーの到着を待つ。

ハネクリボーと俺の距離は十メートル、人食い虫が特殊効果を発動しイタチへと襲い掛かる、ハネクリボーと俺の距離は七メートル、人食い虫が特殊効果を使用して凄まじい速度を見せるがイタチはそれ以上の速度で人食い虫を避ける、ハネクリボーと俺の距離は三メートル、人食い虫はイタチが避けきると霞のように消え去った、俺とハネクリボーの距離は一メートル。

「己の力の無さを嘆くが良い。弱者には死あるのみ」

イタチがフガクやミコトにしたように、サスケに向かって万華鏡を駆使して攻撃を図るのを肌で感じた。

当然そんな事をさせるつもりなど無いので、ここで俺はクリボーの特殊効果を使用。

クリボーの特殊効果は、自身の命を犠牲にして敵の攻撃を一度だけ無効にするというもの。

故に、イタチの瞳術は決して効きはしない。

「何ッ……!?」

俺(クリボー)の効果を認識したのか、イタチが初めて驚愕の表情を見せた。

しかし命を犠牲にした俺(クリボー)は、当然それ以上の事を出来る筈もなく、人食い虫達と同様に霞となって徐々に消えていく。

──ハネクリボー、頼んだぞ。お前の特殊効果が頼みの綱なんだからな。

そう内心で叫びながら消える俺の目の前で、イタチが驚愕の眼差し

を浮かべつつ再度万華鏡の瞳術をサスケに向かって放つのが見えた。
しかしその術は、送れてこの状況に新たに登場した最後のクリボーの特殊効果によって、再び防がれる。
と、それにホッと胸を撫で下ろした瞬間、俺の意識は布団にくるまる自分の肉体へと戻っている事を認識した。
そして俺が横になるこの部屋に、サスケを含めたサスケの御両親もハネクリボーの特殊効果によって転移して来た事を認識し、今度は先程よりも大きく胸を撫で下ろすのだった。

イタチの凶行の巻　下

「なっ、何が?!　此処は?!」
　サスケは自身の両親であるフガクとミコトの二人の傍で、突如目に映る光景が大きく変化して驚愕の声を上げ、頻りに視線を右往左往させている。
　然もありなん。兄による凶行に心底混乱していたのに、突然自分の居た場所とは別の場所へと目に映る光景が変わっているのだから、冷静で居られる筈が無い。
「サスケ、此処は僕の家だよ。だから警戒しなくて大丈夫」
「ゲンセイ!?」
　布団にくるまって横になっている状態から上半身だけ体を起こして声を掛けると、目が溢れ落ちんばかりにサスケが目を見開く。
　俺はそんなサスケを見てまず落ち着けるべきだと判断し、口寄せの印を敢えてサスケでも理解出来るように遅く結んで見せ付け、俺固有の能力であるデュエルモンスターズのモンスターを呼び出す。
　ここで召喚するのは、サスケに理解させる為にサスケが先程まで見ていたモンスターの二体。
　音も無く、陽炎のように空間が揺らめき、次の瞬間にはクリボーとハネクリボーが姿を現す。
「これは……!?　げ、ゲンセイ、お前の口寄せだったのか?!」
「うん、そうだよ。サスケの御両親とサスケを助ける為に行動させてたんだ」
「兄さんがあんな事をすると知っていたのか?!」
「いや、それは知らなかったよ。僕はただ単純に口寄せの修行と口寄せした忍獣との親交を深める為と、忍獣の能力を十全に使いこなす為の修行の意味で里内をブラブラさせてたんだ。
　で、たまたまうちは一族の土地で不穏な物音や血の匂いを感じて、サスケの事が心配になって忍獣をサスケの家に向かわせたんだけど……どうやら正解だったみたいだね」
「……う、嘘だ、あの場にお前は居なかった!　此処で布団に入ってい

るのがそれを証明している！
　それなのに、此処に居てどうやって忍獣に指示を出せるって言うんだ！　お前は兄さんとグルなんだろ！」
　自身の兄の凶行に混乱しているせいもあるだろうが、サスケは俺が味方であると素直には信じられないようだ。
　これは仕方ない。混乱しているのだから、寧ろ当然の反応だと言えるだろう。
　ただし、混乱しつつもサスケが指摘した部分に此方としては鋭いと思わずにはいられなかった。
　将来ナルトと同等の強者となるサスケの片鱗を垣間見たような気がする。
「確かに僕は此処でずっと横になっていたのは認める。でも、それでも僕は自由に忍獣へと指示を出せるんだよ」
「嘘を付いても無駄だ！　俺は口寄せ契約を結んでないから忍獣との交流なんて無いが、それでも多少の知識くらいはある！」
「僕の忍獣は少し他の忍獣とは違うよ。……と言うより、忍獣っていう認識がそもそも間違ってるんだけど、それを今説明するとなるとややこしいから説明をはしょるね。
　えっとね、僕の忍獣の場合だと、僕の視覚・嗅覚・聴覚とかを忍獣と連結する事が可能で、思考すらも連結させる事が出来るんだ。それが理由で離れていても忍獣に僕の意思を伝えられるし、何なら忍獣自体を自分の手足のように動かせる事も可能なんだよ。
　まぁそうは言っても、一度に複数の忍獣と感覚を共有するのは無理だし、コントロールするのも一体が限度なんだけどね」
「……感覚を共有？　そ、それじゃホントにたまたまだったのか……？」
「うん、たまたま運が良かったから助けられたんだよ」
　俺の言葉を脳内で反芻しているのか、少しずつ強張っていたサスケの表情が和らいでいく。
　それを見て俺はもう大丈夫だと判断し、サスケとこうやっていてもピクリともしないフガクとミコトの方へと視線を移し、俺は布団から

出て近付くと二人の状態を確かめ始めた。
　あまり医療には詳しく無いが、それでも大人として多少の知識くらいはあるので、写輪眼による特殊な瞳術に対しての対処はどうしようも無くとも怪我の応急処置くらいは出来るという自負はある。
　それに何より、俺にはデュエルモンスターズの力もあるので、より効果の期待出来る処置が可能な筈。
　ミコトは兎も角、左腕を失っているフガクは重症の為、取り敢えずフガクを優先して俺が怪我の状態を確かめ始めると、サスケは思い出したように焦った口調で喋り始めた。
「そ、そうだ、父さんと母さんが！」
「うん、分かってる。僕のお母さんとお父さんを起こしてくれる？お母さんは医療忍者だし、お父さんも少しは医療忍術を齧ってるって言ってたから」
「わ、分かった！」
　ドタバタと荒々しい足音を響かせてサスケが俺の部屋を飛び出した瞬間、サスケの「ムゲンさん、ミルさん！」という大声が家の中だけでなく隣近所にまで響き渡った。
　俺はその声を耳にしつつ、サスケが両親を連れて戻って来るまでに簡単な処置を施すべく魔法カードを発動させようとする。
　しかし、両親は既に俺の部屋で何やら騒音がしているのを不審に思って起きていたのか、サスケが部屋を出て叫んだ瞬間には扉の近くまで来ていたようで、すぐにサスケと一緒に俺の部屋へと入って来た。
　我が親ながら、流石は上忍だと感心させられる。
「何があったの?!」
「フガクなのか?!　これは一体何が?!」
　ピクリとも動かないミコトとフガクを見て、両親は驚愕の表情を浮かべる。
　そして、フガクが片腕を失って大量の血を流しているのも相まって、尚更に両親の驚きが大きくなったようだ。
「何があったのかは後で説明するから、今は処置をお願い。僕とお母

さんはフガクさんを見るから、お父さんはミコトさんを頼むね」
「分かった！」
「分かったわ！」
大粒の涙を無数に流すサスケが見つめる中、二人の重症患者の処置が始まった。
しかし、俺が出来る事はそれ程には多くない。
それというのも、俺が使用出来る回復系統の魔法カードは、まだその殆どを使用出来ないからだ。
現状使う事が可能なのは、モウヤンのカレーとレッドポーションくらいである。
モウヤンのカレーは食べる必要があるので、意識を失っている二人には使用不能。
故に、現状使えるのはレッドポーションのみになる。
だから俺は口寄せの印を結んで薬を出したのを装うと、レッドポーションを怪我をしているフガクの傷に振り掛けるだけだった。
それでも多少の効果はあって……いや、正確に表現すると結構な効果があり、大量に出血していた血がピタリと止まった。
しかしながら、皮膚の再生まではレッドポーションだけでは不可能のようで、それに関しては母が医療忍術によって適切な治療を施していた。
俺に出来たのは、治療時間の短縮くらいであったと言うしかない。
だがそれでも、母は俺を精一杯に誉めた。
そしてその後は、二人が意識を失っている原因が何なのかを父と母が話し合い始める。
「ミル、原因は分かるか？」
「ごめんなさい。私には分からないの。……毒でも無いし出血による意識喪失でも無い事は分かるんだけど、それ以上は……」
「そうか……。すると、特殊な幻術の類いかもしれないな」
「ええ、その可能性はあるわね」
「と、するなら、だ。紅を呼んだ方が無難かもしれんな」
この火影の里において、五本の指に入る程の幻術使いである紅を呼

ぶのは英断だと言えるだろう。
しかし、万華鏡写輪眼という特殊な瞳術によって掛けられた忍術になるのだから、紅上忍を呼んだとて大した効果は見込める筈も無い。
だがそれを知っている人間は、此処には俺だけである。
けれども流石にそれを指摘するのは目立ち過ぎるという意味で憚られるので、俺はその部分においては何も発言しない。
ただし、それ以外の提案は勿論する。
「お父さん、三代目を呼んで欲しいんだけど」
「三代目を？　理由は……いや、分かった。何があったのかの説明を、三代目にも直接するという事だな？」
「うん」
「しかし、それだとお前の血継限界の事も話さなければならないかもしれんぞ」
「うん、分かってる」
「そうか……。すまんな、ゲンセイ。
……ミル、お前は二人の容態を見守っておいてくれ」
「ええ、任せて」
父は俺に申し訳なさそうに、そして母には強い意思を感じさせる表情を告げると、その場からまるで手品のように消えた。

サスケの闇落ちを防ごうの巻

母とサスケと俺の三人で、フガクとミコト用に布団を用意して二人を寝かせていると、父が三代目や暗部と思わしき複数の忍びを伴って帰って来た。

そうして直ぐ様、暗部達は意識を失ったままの二人の治療を始め、俺達親子やサスケは治療の邪魔となると判断されたのか別室へと移動させられた。

移動した場所は、居間である。

サスケは自分の両親が心配なのか頻りにそわそわしているものの、俺の左隣に座り込み沈黙しており、テーブルを挟んで真正面には三代目が、その三代目を挟むように俺の両親が座った。

事情を知らない三人が真正面に座ったのは、恐らく意図的なものなのだろう。

多分、事情を知っている者と知らぬ者の立ち位置を分かり易くしたのだと察せられる。

「さて、何が何やらと言った感じじゃが……。ゲンセイ、じゃったか？兎に角、この度の事を説明してくれんかのう？」

本当は既にイタチから報告されて知っているのだろうが、それをおくびにも表情に出さずに三代目が言葉を発した。

その表情は本当に自然で、大したものだと感心してしまう程だ。

「御説明する前に、まずは今回の被害者であるサスケに俺が知り得る全ての話をさせて下さい。そうでなければ、話の途中でサスケが黙っていない筈が無いので」

「ふむ……まぁ良かろう」

「ありがとうございます」

少し怪訝な表情へと変えた三代目だったが、特に反論する気は無いようで、至極あっさりと此方の要望が通った。

これには若干驚いたものの、恐らく俺が殆ど何も知らないと思っているからだろう。

そう思いつつ俺は、そわそわ忙しないサスケへと視線を向け口を開

く。
「サスケ、これから俺が話すのは、俺がさっきお前に説明した特殊な力で見聞きした事で、紛れもない事実だという事をまず認識しておいて欲しい」
「あ、ああ、分かった」
「ありがとう。それじゃあ説明するね」
「頼む」
俺が真剣な表情をしているのが原因なのか、サスケは俺へと全力で集中してくれている。
両親が死ぬ程に心配な筈なのに、それでも俺の表情を見て真剣に耳を傾けてくれるサスケにこれから辛い話をしなければならないと思うと、正直心が押し潰されるかのような感覚を覚えた。
だが、サスケが闇の世界へと身を落とさない為にも、ここでそれを食い止める為にも、どんなに辛かろうが苦しかろうが、どんな感情にも関係無く話さなければならない。
故に俺は覚悟決め、少し強い口調を意識して説明を始める。
「まずは、うちは一族が抱える問題について話そう」
「うちはの問題？　兄さんの……イタチの話ではなく？」
イタチを兄さんと呼ぶ事に躊躇いが生じているらしいサスケは、少し渋面を浮かべてイタチと呼び捨てにした。
それを聞いて益々心にくるものがあるが、それを押し殺してサスケの疑問に頷く事で言外にその通りなのだと示して説明を続ける。
「うちは一族が有する力、写輪眼。これはとある脳内物質が分泌される事で、特殊な遺伝子を持つ者だけが開眼するに至る血継限界。そしてその脳内物質というのは別にうちは一族の者だけに限った事ではなく、人間なら誰もが分泌される物質であり、その効果は多幸感や全能感と言った感じでアドレナリンやエンドルフィンに似た物質なんだよ」
「そ、そうなのか？　あ、いや、話の腰を折ってすまん。続きを頼む」
「大丈夫、理解出来るように分からない部分があったら質問してくれて良いよ」

うちは一族であっても知らない者が殆どだろうから、サスケが知らなくても不思議ではない。
故に俺は笑みを浮かべてそう告げたが、チラリと三代目を見たら驚愕の表情で何故その秘匿された事実を知っているのだと言いたげな様子だ。
だが敢えて俺はそれを無視して、尚も説明を続ける。
「うちは一族の血継限界っていうのは、本当に強力だ。そしてあまりにも強力なせいで、写輪眼を開眼した者は術を研鑽する事に緻密を注いで心を鍛える事を軽視してしまいがちになる。それが非常に問題なんだよ。特にさっき説明した脳内物質のせいで、全能感や多幸感を覚えてしまった者達は尚更不味い。
サスケ、何が良くないのか分かる？」
「え？　……いや、俺には分からない」
「デメリットがあるのに心を鍛えなかったせいで、視野狭窄に陥るんだよ。しかもそれだけじゃなく、視野狭窄に陥る事で、それに併発して被害妄想も抱きがちになってしまうんだ」
「視野狭窄と被害妄想……？」
「そう、視野狭窄と被害妄想だ。だからこそ、うちは一族の人達は親しい者を亡くすと突飛な行動に出たりするし、或いは自分の力に酔って傲慢になったりあらゆる事に我を通そうとする自己中心的な性格になりがちだ。
サスケの回りの大人で、今例に上げたような人は居なかった？」
「……居た」
「だろうね。しかも沢山居たんじゃない？」
「……ああ、確かに多かったと思う。他の一族の大人と比べて、確かにゲンセイが指摘するように沢山居たと思う」
自分の記憶を手繰るかのように首を少し傾げつつ答えたサスケは、しかしどこか納得出来ないような、そんな表情を浮かべている。
恐らく、自身の属する一族を馬鹿にされたと感じたのかもしれない。
「今説明したうちは一族についてのデメリットを、良く覚えといてね。

ここからが本題になるから」
「分かった」
「うん。それじゃ本題に入るね。
うちは一族の大多数は、術を研鑽する事はあっても心を鍛える事はしなかった。目に見える分かり易い術という力、それだけを追及してしまったんだよ。デメリットを一ミリも理解しないままでね。
その結果近年のうちは一族は、この里の警備部隊という世襲性の安定した職を他の一族から優遇されて代々独占してきたのに、里の中枢に関われるような権利も寄越せと言い出した。本来は優遇されているからこそ、里の中枢まで関わってしまえばパワーバランスがうちはに偏り過ぎるのに、それを無視して権利を主張し始めてしまった。
しかし当然、他の一族からすればこれ以上の優遇を許せる筈が無い。だって、それだと他の一族が馬鹿みたいじゃん？
でも、視野狭窄で被害妄想的な思考に囚われるうちは一族の多くは、『うちは一族は優秀な一族だ！　他の一族の者達は嫉妬してるんだ！　だから俺達を抑え込もうとするんだ！　断じて許してやるものか！』って突飛な考えに至り、『全ての権利をうちはに寄越せ！　俺達が優遇されるのは当然だ！　地位も名誉も、それら全て俺達のものだ！』って考えがうちは全体に流れてしまい……」
俺が敢えて言葉を止めると、サスケが生唾を飲み込む音が響いた。
勿論、それはサスケだけではなく、俺の両親も同様である。
そして三代目は、ここまで俺が今回の事についてこれ程に深くまで事情を知っている事に心底驚いているらしく、目を見開き顔を強張らせていた。
しかし三代目はそれだけでなく、これ以上は不味いと思ったのか慌てて話に割り込もうとし、「やめ――」と言葉を発する。
だが、サスケの為には必要な事なのだ。
故に俺は躊躇せず、そして三代目の割り込みを絶ちきるように言葉を続ける。
「最悪な事に、うちは一族の大多数の人達は、クーデターを計画するに至ってしまったんだ。そして、そのクーデターを計画した人達の纏め

役は、サスケの父であるフガクさんだよ」
「なっ!?　そ、そんな馬鹿な!?」
「サスケ、一番最初に言っただろう？　俺の特殊な力で知り得た紛れもない事実を話すって、俺はそう言ったよね？
サスケ、これは紛れもない真実だよ」
サスケは愕然とした様子で、俺の真剣な顔を見て絶句した。

三代目の堪忍袋が切れるの巻

「待て、待て待て待て待て待て！　待つのじゃ！
それ以上はならん！　何処でその秘密を知り得たのかは分からんが、それ以上を話すのは許さんぞ！」
これ以上は絶対に話させないと、そう告げる三代目の表情は非常に強張っていて、本気で焦っているのが分かる。
しかしその反応によって、俺の話た内容が全て真実であるのだという証明にもなり、それによってサスケの表情はどんどん暗いものへと変化していく。
そんな状況にあって俺は、サスケから三代目へと視線を移すと決定的な言葉をぶつける。
「イタチさんと約束したからですか？」
先程までの話の内容でも爆弾を放り込んだに等しいものであったが、たった今俺が発した言葉によって室内の空気は凍りついた。
それもその筈、知るのは三代目とダンゾウだけの話なのだし、あまりにも今回の話の根幹になる事柄だけに、場が凍りつくのは必然だった。
「イタチとの約束……!?」
「うん、そうだよ。サスケ、ここからは本当の本当に話の根幹になる部分だ」
「ならん！　ゲンセイ、やめよ！　イタチの想いを踏みにじるのは許さんぞ！」
三代目から死を幻想させる程の濃密な殺気が溢れ出るが、俺はそれを懸命に我慢して三代目へと睨み付けた。
そして三代目の殺気に負けてたまるかと、そう思い強く、然れど決して声を荒げないよう注意しつつ言葉を発する。
「全てをサスケに伝えなかったら、サスケが真実を知らずにこれからの日常を過ごすのなら、きっとサスケの心と性格は捻曲がってしまいます。うちは一族にはさっき説明した通り、大きなデメリットがあるんです。なのに心を鍛えようとしないで、復讐を考えて生きるように

なってしまったなら、辛く厳しい心の製錬を蔑ろにして、サスケはきっと目に見える結果である術ばかりに傾倒するようになるでしょう。

三代目、あなたは判断を間違っている。真にイタチさんの想いを大事にしたいのなら、ダンゾウを罰してサスケに危害が加えられないようにするべきです。それこそが――」

「黙らんかッ!! イタチがどんな想いで今回の事をしたのか、それを子供のお前が分かったような口で言うでないッ!!」

「イタチさんが三代目に事後報告で今回の事をした理由、それが分かりますか?」

「まだ言うかッ!!」

「はい、言わせて頂きます。例え生意気なガキだと思われようと、人の想いを踏みにじるクズだと思われようと、僕は……俺は、あんたが理解するまで何度だって言ってやる!! 分かったら黙って聞いてろッ!!」

事ここに至り、自分でも驚く程に我慢の限界にきていたのか、予定とは違って声を荒げてしまった。

しかしそれが功を奏したのか、三代目はギョッとして口を閉じた。それを見てチャンスは今しかないと思い、俺はこの勢いに乗せて言の葉を紡ぐ。

「あんたが誰の血も流れないようにと日和見だったから、だからイタチは里を守る為に己の一族を滅ぼさねばならなかったんだよ! あんたがダンゾウをさっさと殺しとけば、こうはならなかった! 或いは、うちは一族のクーデターを何とか抑え込もうとしていたフガクさんの全面的な味方をしていれば、うちは一族の一部の馬鹿も黙らせる事が出来たのかもしれない!

確かにサスケの命を助ける為にとは言え、かなりイタチ自身が暴走して今回の事になったと言えるが、あんたが今俺が言ったどれか一つを選択していれば、それで大きく結果は変わった筈だ! 少なくない血は絶対に流れるが、今のように糞みたいな結果じゃなかった筈だ!」

里を大事に思うばかりに、三代目は非情な決断を取れなかった。
そしてその結果、ダンゾウが闇で動き、イタチは動かざるを得なくなった。
そう、全て三代目のせいというのは違うが、二割くらいは三代目のせいじゃないかと俺は思っている。
原作を読んでいて、俺からするとそう思わざるを得なかったのだ。
ともあれ、物凄く口汚く言い募った俺に対して、三代目は歯を食い縛って沈黙してしまった。
決断が少し遅かった事を、本人は本人なりに悔やんでいたのだと察せられる。
当たり前だ。三代目は心底この里を愛しているのだし、この里の住人を心から守護しているのだから。
それを見て悟った俺は、感情とその場の勢いで声を荒げ言い過ぎたと思い、少し後悔した。
だが、両親が俺に向かって発した言葉により、目が点になってしまって、思わず幻術にでも掛けられたのかと悩まされる事になる。
「ゲンセイ、やめなさい。相手は老い先短い火影様ですよ」
「その通りだ。私達はお前の説明で何となく理解出来るようになったから言うが、火影様は火影様で無駄にお考えになる事が山のようにあるのだ。
だが、確かにゲンセイの言葉にも一理ある。故に、ゲンセイ……もっと言ってやれ！」
かなり強めの口調で俺を嗜める両親、とか思った瞬間の母から父へと繋がる怒涛の御言葉。
死体に鞭打つような非情な御言葉である。
先程まで生意気に言い募った自分だったが、両親の意外過ぎる言葉に唖然とし、そして呆然となってしまう俺。
そんな俺とは裏腹に、サスケが小さくポツリと呟く。
「俺を助ける為……？　ゲンセイ、それはどういう……」
「へ？　あ、ああ、それは――」
まるで消え入りそうなか細い声で発せられた言葉に、俺は現実に

帰って返答しようとした瞬間、三代目によって中断させられる。
「良い、ゲンセイ。もう良い。その先はわしから話す」
殺気は何処に消え去ったのやら、今の三代目からは殺気どころか何の気迫も感じられない。
しかし確かに、三代目の目は意を決したかのうよな力強さが感じられた。
「サスケよ、今から話すのはイタチの真実じゃ。心して聞け」
「わ、分かっ……りました」
「うむ。……イタチはの、里をうちは一族の被害妄想の為に蹂躙されるのを良しとせず、里の未来を守る為に今回の凶行に走ったのじゃ。わしが平和に解決する事に傾倒するあまり、うちは一族の抱える問題を軽んじてしまったばかりに、そしてダンゾウが闇で動いておったばかりに、イタチはわしの考えを無視して独断で行動に移した。
そうして、本来はサスケ以外のうちは一族の者は滅ぼした後、イタチはわしに事後報告するつもりじゃったらしい。しかし、イタチが言うには何やら邪魔が入ったとかで、サスケだけを生き残らせる筈がフガクとミコトも生き残ったらしいのじゃが……それはもしかしなくとも、そこにおるゲンセイが理由なのじゃろうな」
「一族を滅ぼすってのは、ゲンセイの話で理解した……しました。でも何で、それで何で俺を救うって話になる……ですか？」
「うむ、それはダンゾウが原因じゃ。根、という組織を知っておるか？
父親から聞いた事は？」
「いえ、無い……です」
「そうか……。根とは、火影直轄の暗部とは別組織の、暗部達の組織名じゃ。そしてその組織のトップが、志村ダンゾウという男じゃ」
「志村……ダンゾウ」
「そうじゃ。そのダンゾウは、最初こそ何が目的かわしも分からなかったのじゃが……いや、クーデターを企んでおるうちは一族を危険視したのか、うちは一族の者でも腕利きの者を秘密裏に始末し始めた。そうわしは認識しておった。
それ故にわしは、ダンゾウに命じてうちは一族の者には手出し無用

と言い聞かせ、お主の父親であるフガクと平和的に解決しようと幾度も話し合っておった。しかし、ダンゾウの目的は他にあったのじゃ。決してクーデターを企んだうちは一族を危険視したから動いていたのではなかったのじゃ。

……いや、より正確に言えば、クーデターを企んでいたから危険視したというのも事実なのじゃろうが、しかしダンゾウはそれだけの理由ではなく、うちは一族の血継限界である写輪眼を狙って丁度良い口実が出来たから襲ったというのが真実なのじゃろう。

故に、ダンゾウは次々と腕利きを狙って殺し、写輪眼を奪っておった。……わしがその事実に気付いたのは、今日イタチが凶行に走り、わしのところに事後報告来た時じゃった」

体全体を押し潰すかのような重苦しい話の内容は、サスケが薄々察し始めている事実へと繋がって、決定的なものを三代目から言葉として耳に入っていく。

「イタチはの、ダンゾウと取引したそうじゃ。『里の存続を危ぶむ一族を滅ぼすのは仕方ないが、サスケの命だけは奪わないし奪わせない。もしもサスケに手を出せば、貴様のやった事を暴露する』と、そうダンゾウを脅したそうじゃ。

そして今日わしにイタチが最後に言うたのは、『三代目様、どうかサスケを守ってあげて下さい。俺の事は秘密にし、どうかサスケの事をお願いします。……父や母も殺さねばならなかったのですが、それは邪魔が入り出来なかったので、勝手とは思いますが、どうか父と母も同じくお願い致します』と、そう告げて里を出て行った」

サスケはもう、三代目の言葉を聞けているのか分からない程に嗚咽しつつ泣き叫んでいた。

まるで命を燃やし尽くしてしまうような、そんな風に思える慟哭だった。

そしてサスケの両目は、それぞれに二つの勾玉が浮かび上がっていて、不完全ながらもうちは一族の血継限界である写輪眼を確かに開眼していた。

デュエルモンスターズという力の説明の巻

サスケの悲痛な慟哭は日の出寸前まで続き、俺の両親が終始そんなサスケを抱き締め、日の出直前になってサスケは気を失い眠りに就いた。

精神的負担が限界になったからなのだろうが、まるで電池が切れてしまったかのようにプツリとサスケの意識が途切れたのである。

それからは両親がサスケの御両親が眠る俺の部屋へとサスケを運び、独り孤独にならないようフガクとミコトの間に新たな布団を敷いた。

目が覚めたその時、室内にポツンと独りっきりでは良からぬ方へと思考が進むかもしれないし、それに何より両隣に自分の両親が寝ていると気持ちが安らぐだろうと考えての事だ。

そうした後、再び居間には両親と三代目と俺が集まり、今回は両親が俺を挟むように隣へと座って、三代目の両隣と後ろにサスケの御両親を治療していた暗部達が座った。

これから話合うのは、恐らくは何故俺が知らぬ筈の事を知っているのかという理由を尋ねる……いや、尋問を行う為なのだろう。

暗部の人達も俺が三代目に口汚く発言したのを聞いていただろうし、きっと敵意を持っているのだろうと察せられ、尋問は厳しいものへとなるだろうと覚悟しなければならない。

だが勿論、暗部達から殺気を向けられるという事は無く、しかし仮面をつけているので表情は分からないから、怒っているのかどうかが分かりづらいので若干不安になってしまう。

目に見えず分からないというのは、こんなにも不安を掻き立てるものなのかと、そんな風に思い、また緊張感が否応なしに増していく。

「全く……お前達夫婦は相も変わらず口が悪いのう」

三代目が居間に漂う緊張感を払拭するように、至極呆れた表情で呟いた。

すると俺の両隣から、それぞれに三代目をからかうような口調の言葉が発せられる。

「三代目の自業自得です」
「そうですよ。苦言を呈する部下が存在しなかったら、里の長が間違った方向へと進み続けちゃうじゃありませんか。
ゲンセイもそう思うわよね？」
「へ？　え、あ、いや……」
「良いんだぞ、ゲンセイ。人間は年を取ると、色々な柵とか昔のあいつは正しい決断をしていたから昔のようにきっと正しい判断を下すだろうとか、そんな風に現実を受け止められず間違った判断をしてしまう事が多くあるんだからな。
だからな、こういう時はズバッと言って良いんだ」
「うん、あ、いや、えぇと……。わ、分かったよ」
目の前に三代目や暗部達が居るのに、両親はズバズバと躊躇無く言葉の鞭を打つ。
俺がそれに何と答えて良いものか迷いつつ頷くと、三代目がガクッと項垂れ、暗部達が小さく何度も頷いていた。
それを見て益々俺としては困惑が深まるのだが、両親が罰せられないかと心底不安が募ってしまう。
「お主達の長男が亡くなってから、お主達は随分静かになったと思っておったのに……。どうやら噂は本当のようじゃな」
「噂？」
三代目の言葉に疑問符が浮かんだ俺は、知らず知らず疑問の声を出してしまっていた。
それを受けて三代目は、「うむ」と呟き頷くと、疑問に答えるように言葉を紡ぐ。
「二年程前から、長男のムジロが亡くなる前の時だったかのように、明るい口調で人を食ったような発言が戻ったと聞いておったのじゃ。
そのせいか、今日……ゲンセイ、そなたに叱責されて納得した。ムゲンとミルの両性格に大きく影響されておるのを、嫌になる程に理解させられた」
二年前というと、多分俺が前世を思い出した瞬間からなのだろう。
そしてそれが理由で、両親が罪悪感を抱えていたのを理解した俺

が、それを払拭しようと色々やったり言ったりした結果、両親は長男であるムジロが生きていた時のように振る舞うようになったのだと察せられる。
……が、しかし、まさか両親が三代目すらからかい口調で苦言を……いや、忠言をするような立場の人達とは思いもしてなかった。
俺が知らなかっただけで、両親はもしかすると結構凄かったりするのかもしれない。
「ハァァァ……。まぁそれは良い。ゲンセイ、お主が何故イタチの事やうちは一族の事について知っていたのか、それを話してくれるかのう？」
三代目は大きく溜め息を吐いた後、やはり当たり前だが今回のイレギュラーである俺について詳しく知る為の疑問を尋ねてきた。
これは予測していたので、俺は両親の事は兎も角として、思考を切り替えると真剣に喋り始める。
「僕の事は両親から聞いていましたか？」
「それはどういう……？」
「僕の力、血継限界についてです」
血継限界というワードを口にした瞬間、三代目を含めた暗部達全員からザワザワとした驚きの声が上がった。
それもその筈、俺の一族は固有の忍術を持たないし、血継限界も勿論持っていないのだから、彼らが驚くのは必然である。
しかし俺は、彼らの疑問を無視して言葉を続ける。
「僕の血継限界は、恐らく誰も見た事も無いし聞いた事も無い力になるでしょう。この世界とは別の、別次元に住む者達の力を借りて、別次元からこの世界へと口寄せするのが僕の力。
それはつまり別次元の物、自然現象、生物、と言った感じで様々な物を呼び出す力が僕の血継限界となります。そして僕はそんな力を、『デュエリスト』と呼んでいます」
三代目を含めた暗部達が、口々にデュエリストと呟いている。
この世界の住人である彼らが、デュエリストという単語を呟いているのが少し違和感を伴い、若干面白くもあった。

だがここで笑みを浮かべてしまえば、信じて貰え無くなるかもしれないので必死に我慢し、彼らが俺の説明した事をちゃんと脳内に刻むまで黙して待つ。
すると数十秒した後に、三代目から疑問の声が上がった。
「口寄せというのは、別の場所から術者本人が居る場所へと、物や生物を呼び出す忍術。お主が言うデュエリストとやらの力は、その口寄せと何ら変わらんと思えるが？」
「いえ、明確に違います。その証拠を御覧になりますか？」
「うむ、それを確認せずには話が進まぬからのう。当然確認させて貰う」
「分かりました。では、実際に口寄せします」
いきなり口寄せを始めたら暗部の人達に殺されかねないので、口頭で己の行為を認めて貰ってから口寄せの印を結び、精霊界から人の言語を話せる者を選んで召喚する。
今回召喚するのは、エルフの剣士だ。
昨日までなら……サスケとサスケの御両親を救うまではとても召喚出来なかった高いステータスを持つモンスターである。
それを何故か日付が変わった瞬間に召喚出来るようになった事を、サスケにアレコレ説明している途中で気付いていた。
昔ナルトを助けた時の翌日と同じ現象だ。
この謎の現象の理由は分からないが、俺としては非常に有り難いので文句などなく、今回に至っては人語を話せるモンスターが必要となるので尚更有り難い。
もっとも、エルフの剣士よりも低いステータスで人語を操るモンスターも居たんだけど、俺としては思い入れのあるモンスターを召喚してみたかったからエルフの剣士を選択しただけだったりする。
ともあれ、居間の一角が陽炎のように揺らめくと、次の瞬間音も無くエルフの剣士が姿を現す。
それを見た三代目や暗部達は感嘆の声を漏らすものの、その反応はあくまでも八歳の俺が口寄せした事に感心しているだけであり、精霊界とか血継限界とかを信じた故の驚きでないのは明白。

だからこそ、俺は信じて貰う為に召喚したエルフの剣士に向かって命令する。
「エルフの剣士、君とは初めましてだね。よろしく」
「宜しくお願い申し上げます。我が君」
「此方の人達に、この世界とは別次元の精霊界の事とか、精霊についてを説明してやってくれない？」
「御安いことで御座います。お任せ下さい」
両親は精霊とか精霊界の事を信じていたが、まさか人語を操る存在も居たのかと驚いている。
しかしそんな両親を置いておいて、俺がエルフの剣士と普通に会話を終えると、その時にはまるで達観したかのように少し遠くを見るような目を両親がしているのが俺の視界に映った。

説明会は終わったけど……の巻

三代目や暗部達への説明会という名の尋問の場を、俺は全てエルフの剣士へと任せた。

勿論その場の状況によっては、デュエリストの力を証明する為に魔法カードやトラップカードの効果を見せるべく、回復アイテムや罠を精霊界から然も口寄せで呼び出したかのように偽り、その高く有用な効果を見せ付けたりしたのは言うまでもないだろう。

そうして三代目や暗部達は、エルフの剣士による話が終わると漸く精霊界の事とか精霊の事、そして勿論俺の力であるデュエリストという名の血継限界の事も信じてくれるようになった。

この夜明けと同時に始まった説明会は、昼を過ぎても続いていたので、終わった頃には酷く疲労感が襲ってくる始末だった。

――腹減ったし疲れた……。肉体的には兎も角、精神的に疲れたな。

説明会が終わると母が昼食を用意し、何故かこの居間が今回の騒動の対策本部と化した場所で、不釣り合いな様子で食事を摂り始める俺達家族と三代目や暗部達。

一口おかずを口に含めば誰か知らない忍者達が三代目へと何やら報告して出て行き、そして白米を口に含めば再び新たな忍者達が何やら三代目へと報告して出て行き、それがひっきりなしに続いた。

そんな慌ただしく入れ替わる忍者達の中、知っている忍者もチラホラと居て少し驚く。

紅上忍、アスマ上忍、それにコピー忍者として有名なカカシ上忍等々と、原作でも登場した人物達と続々遭遇しつつ、勿論それ以外の忍者とも遭遇。

その時の忍者さん達の全員が、何故火影室ではなく此処なのかと、そして何故普通に俺みたいなガキが居るのかと、そんな風に思い疑問げな表情を浮かべていた。

それは仕方ないと俺も思うが、あまり俺という存在は気にしないでもらえたら幸いである。

変に目立つのはよろしくないし、場違いなのは自分自身が一番理解しているので皆さんには察して欲しい。
そうして慌ただしくも忙しない時間が暫く続いた後、夕方頃になって三代目は暗部達を此処に残して帰って行った。
多分、フガク夫妻の護衛という名目であり、実質は監視なのだと察せられる。
フガクは平和的な解決を求めていたが、それでもうちは一族の長としてクーデターを企む者達の纏め役をしていた事もあって、やはり対外的な意味合いもあって監視してますよという姿勢を見せる為には必要な処置なのだろう。
少し世知辛いと思う俺は、きっと甘いのだろうな。
こういう処置を三代目は取れるのなら、最初からやっておけよと言いたくなる。
ともあれ、今回は自分なりに考えると最低限の事は出来たんじゃなかろうかと思う。
サスケの為にはフガク夫妻……と言うよりは、奥さんはクーデターに深くまで関わっていないからフガクさんからになるものの、目が覚めたフガクさんがサスケへと真実を話してくれれば万事うまくいくって考えて間違いないと思う。
今のサスケなら突飛な考えに至らないだろうし、闇落ちとかは考えなくて良い筈だ。
そう考えるとガクッとくるものがあったのか、抗いがたい眠気が唐突に襲ってきて、俺は堪らず暗部達の目の前で横になった。
すると召喚していたエルフの剣士がニコリと微笑みを浮かべて近付いて来て、自身のマントを外して俺へと掛けてくれる。
「ありがとう」
「いえ、当然の事で御座います」
まるで執事もかくやと言った雰囲気でかいがいしく世話をしてくるエルフの剣士に礼を述べると、その時ふと思った。
――いつまで居るんだろう？
俺が召喚しといて疑問に思うのも何なのだが、やはり深夜１２時を

回る時までは召喚されっぱなしなのかもしれない。
三代目達への説明の為に召喚したが、それが終わり暇になったエルフの剣士には申し訳ない。
――今寝ると昼夜逆転するし、エルフの剣士と修行してみようかな？
ポンと思い付いた事なのだが、それが以外にも妙案に思えなくもない。
エルフと言えばやはり弓って感じで有名なので、そこは勿論使えるだろう。
弓の師匠として的確な人物かもしれない。
少し考え始めると全てが適切な事のように思えて、俺は素早い動作で起き上がるとエルフの剣士を伴って庭に出て、予備の弓と自分の弓を倉庫から取り出して準備した。
そしてエルフの剣士に笑顔を浮かべつつ予備の弓を手渡すと、それを自信がありそうな笑みで受け取ってくれる。
「弓を自分なりに練習してるんだけど、教えてくれる人がいないんだ。弓は出来る？　出来るなら教えて欲しいんだけど」
「お任せ下さい」
突如俺がエルフの剣士を伴って庭へと出たのを不思議に思った暗部数名が見守る中、エルフの剣士は弓を構えると矢を三本も手に持って全部を番え、標的である木材に向けて一度に三本を放つ。
それにギョッとする俺を置き去りに、矢は三本全てが的へと命中した。しかも命中した矢は深々と刺さっており、とても俺が使用している弓と同じ出来の物の結果とは思えない。
因みに、暗部達は心底感心したように「ほぉ」と声を漏らしている。
やっぱりクナイや手裏剣は使用する事がある忍者だが、遠距離用の弓を使用する者が居ないからこそ驚いたのだろう。
「スッゲェ……！」
「こんな事が出来るようになる為には、まずは素早く連射出来るようになるのが肝要です。故に、一本ずつ正確に、しかし出来る限り素早く矢を番えて放つ訓練をすべきでしょう」

何でも無いかのように、そして然も当然かのように告げたエルフの剣士に呆然となってしまう俺。
そんな俺を見てクスッと笑うエルフの剣士は、更に言葉を続ける。
「さぁ、我が君。まずは準備運動も兼ねて一本を」
「そ、そうだね」
「焦らず訓練するのが弓です。じっくりと取り組みましょう」
爽やかな笑みと共に促すエルフの剣士に従い、俺は弓を構えて矢を一本番えると勢い良く放つ。
そして放たれた矢は的から十センチ離れた地面へと突き刺さり、少し物悲しい雰囲気が漂った。
だがこれでもかなり上手くなった方で、今回は外れたがいつもは十本中七本は命中させていたりする。
しかしそれを知らない暗部達は「ブフッ」と笑いを堪える始末で、俺としては居たたまれない。
「少し構えが悪いですね。左肘が下がっているので、それを少し修正すれば良いでしょう」
イケメンエルフは、俺の失敗を笑う事もなく指摘してくれるが、それが却って悲しくなるという事を知って欲しい。
そう思いつつも、折角教えて貰ってるし、尚且つ俺は教えて貰う立場なのだから何も言わず指摘通りに弓を構え、新たな矢を番えると勢い良く放つ。
するとその矢は見事的に命中。しかも、俺が今まで放った時より遥かに感覚が違うと思える程に易々と矢を射れたような気がした。
それを感じて少し呆気にとられていると、エルフの剣士は小さく拍手をしながら誉めてくれる。
「一度の助言で完璧に修正されていました。流石ですね、日々の修練が窺い知れます」
「え、あ、うん。ありがとう」
「さぁ、次々にいきましょう」
少し照れながら俺が返答すると、そこから促され次の矢を放つ。
そうしてエルフの剣士によるブートキャンプは、何と夕御飯が出来

るまで続き、俺はひたすら矢を放ち続けたのだ。
中盤からは拷問としか思えなかったものの、爽やかな笑みを浮かべるエルフの剣士が、何故か爽やか笑みを浮かべているものの俺には鬼のように思えて何も言えず、粛々と指示に従って矢を放つという地獄のような時間だった。
俺としてはもう二度とエルフの剣士と二人きりではやらないと言わざるを得ないだろう。
教師としては大変優秀なのは認めるところだが、ストッパーとなる誰かを召喚しなければ延々とさせられるので、クリボー的な奴とかを一緒に召喚しようと心に決めた。